

## 環境事始 十帖 環境科学研究センターの発足

横浜国大に移り安全工学科の環境基礎工学に所属、三年後に研究センターとして独立した。同科の人はバラックの仮り住いなのに鉄筋四階の部屋を貰った。直ぐにコピー機と和文タイプを入れた。事務局に一台しか置いてなかった時代である。職員は付かず、研究生の東工試の堀本能之、自動車研の加地浩成そして学生だった花井義道の三人で門出となった。夫々先生が劉備玄德ならば関羽、張飛、諸葛孔明の役という次第。ゴルフ場跡に大学の建設が始まり先発としてクラブハウスの空家に移転した。気分は梁山泊の山賊か。玄関前までゴルフ場行のバスが着き専用車同然。一階を占領して学生共々食事を作り置の部屋で寛ぎ風呂を沸かした。GC-MSも設備し、研究は夜昼無制限。一同春は花見、夏は花火と和気藹々の雰囲気だった。先生は生来、猫の苦沙弥先生宜しく太平楽の嗜好があって自ずとそうだったようだ。もう一つの勸善懲悪の性癖を示す事件がこの時期に起ったので併せて記す。ある日一本の電話があった。婆様の秋田弁でよくは判らぬが奥の細道の名勝象潟が潰されると言う。救援を約して先遣隊を送った。先方は地獄に仏と山海の珍味を供応した。加地と秋山は喜んだが堀本は先生の命令を守ると断って食堂で親子丼で済ました。以後規律厳正と信用された。事は第一製薬の工場誘致で敵方は県と土門三之丞町長と秋田大学滝沢行雄教授で、味方は由利郡婦人会と漁業組合で後藤ヨシ会長と鈴木正之元校長先生が代表だった。象潟は芭蕉が感嘆した九十九島が浮ぶ景勝。一夜大地震で隆起して本荘藩が壊し掛けたのを干満寺の覚林和尚が死を賭して阻止した史実がある。爾来村民は一島を一家が受け持ち松を植え草を刈って守り続けた。今も田植え時水面に秀麗な鳥海山を映し昔を偲ぶことができ、天然記念物に指定されていた。昭和末世そこに工場が来る。町民は大漁旗を振って反対デモを繰返し、県は秋田大学に工場は安全だとアセスメントを書かせた。住民はこれでは対抗できぬと先生に救いを求めたのだ。先生達は一年間製薬工場の廃水を分析して危険である事、海に入って魚、虫、貝、海藻を採取し遠浅の岩礁は無類の生態系である事、廃水でハタハタの繁殖地が破壊される事、廃ガスで照葉樹と落葉樹の境界の貴重な植生が影響を受ける事、残る島全部の写真を撮って克明に記録し正に天然記念物に値する事など調べ、公害による環境と文化の破壊は必至であると結論付けた。文化庁に請願にも行った。結果滝沢教授はそのアセスを引っ込めた。まさか国立機関が婦人会の依頼で動くとは思わなかったろう。会社は遂に本荘銀行に65億円預入れて不退職の脅迫手段に出た。先生は味方の悲観論を押さえて、仙台通産局を訪ね、国は係争中の計画を支援することはないと言質を得た。直ぐに皆に知らせ、銘々社長宅に抗議の葉書三通ずつを出す作戦に切替えた。以下は推測劇である、毎日郵便受けが満杯になり奥方は動転し、社長は担当部長に詰問した。部長は反対運動の激しさの報告を曲げ、そのため決定権者に真相が伝わってなかったのだ。こうして会社が逡巡していた矢先、田中角栄親分逮捕の衝撃が日本を駆け巡った。町長の小角栄は後ろ盾を失い、製薬工場の象潟進出は白紙撤回となった。その予定地には由利高校が建った。環境研究では間々紛争に遭遇し、それも懸命の仕事とならざるを得ない宿命があった。当研究センターもう一つの側面を示す一幕だった。